

巻頭言

新たな歴史の始まりの予感

鹿児島大学歯学部長 宮 脇 正 一

平素より鹿児島大学歯学部の活動にご理解とご協力を賜り誠に有難うございます。この度、鹿児島大学歯学部紀要第38巻を皆様にお届けできることを、歯学部長として大変嬉しく思います。

さて、現在国立大学を取り巻く環境は年々厳しくなっており、IoT (Internet of Things)、ビッグデータならびにAIの活用などによる既存の産業構造や就業構造の変化に伴う第4次産業革命を見据えながら、18歳人口の減少に応じた教育システムの見直しが各大学に求められています。中でも地方大学には、総花主義や平均点主義から脱却して、特色を出すことが求められています。そのためには、産学官連携や地域連携などの国内での取り組みに加え、留学生の積極的な受け入れや優れた日本型教育システムの輸出による国際展開を含めた幅広い戦略が必要となってきます。しかし鹿児島大学では、運営費交付金の減少等に伴う業務や経営の効率化ならびに教職員の削減なども行われており、本学歯学部は社会的要請を見据えつつ同時に本学の方針に応じた改善・改革を進めなければいけません。また本邦では、急速な少子高齢化により、歯科も含め医療の在り方は健常者型から高齢者型へ移行しております。したがって、このパラダイムシフトへ対応し、国民の健康寿命の延伸に貢献し得る歯科医師を育てるための教育・研究・診療体制の改革ならびに周術期患者への対応など医科歯科連携の強化が求められています。さらに、南九州地域では近い将来、大地震や桜島・霧島山の大噴火など大規模災害の発生が懸念されることから、災害歯科医療や法歯学への取り組みも推進すべき状況にあります。

そのような中、昨年(2017年)、鹿児島大学歯学部は創立40周年を迎え各種記念事業を催すと共に、一昨年に低下した歯科医師国家試験の合格率は上昇に転じ、科学研究費新規採択率が本学の全部局間でトップとなったことに加え、卒業生が鹿児島県歯科医師会の会長に初めて就任するなど、とてもおめでたい節目の年となりました。また、平成17年度以降の卒業試験における単位認定問題がようやく解決しました。さら

に、一昨年から、歯学部の組織力の強化、財政基盤の確立、既存分野の強化、組織再編ならびに他の組織との緊密な連携を推し進めてきた結果、前述の成果に加え、歯系大学院生の大幅な増加、IR室および地域連携高齢者歯科医療学センターの設置、新たに3大学と部局間学術交流協定を締結するなどの国際交流の推進、JICA支援事業への参画、歯学部基金の創設や患者口腔内除去貴金属の寄付などによる新たな財源確保、鹿児島県歯科医師会との緊密な連携による災害歯科医療などの強化に加え、歯科学院歯科技工士学科施設貸与の検討なども行って参りました。そして現在、第3期中期目標・計画の中間評価や分野別評価に向け、準備を進めています。

さて、今年(2018年)は戌年です。「戌」には、忠犬ハチ公のように、真面目・勤勉・努力家等の意味があるとのことで、本学歯学部構成員の姿を表していると言えます。今年も昨年同様に改革を推し進め、創立40年を超えた伝統ある歯学部に対応しい新たな歴史を刻んで参りたいと思いますので、引き続きご協力を賜りますようお願い申し上げます。